

ネオンライトに沈む月

真芽

鍾柳亭という名の飲み屋がある。都会には場違いな、古い居酒屋だ。

店の出入り口である扉から、戸棚やカウンターといった店の中にいたるまで大まかなものは木造で、おまけに天井へ吊るされた埃まみれの電球は昔さながらといった有様だ。蛾や名前もわからない小虫などが飲み屋の看板が放つ黄色い光に寄せられて、その真下のコンクリートへ骸の山を築いている。

そんな客足の少ない飲み屋にその男はいた。中央に近いカウンターで、酒を飲んで酔っ払っているスーツ姿の中年である。

男は瓶ビールをちびちびとガラスのコップに注ぎながら、独り言のように愚痴をこぼす。

俺が若い時は働いていた会社がまだ小さくてなあ……仕事はそれなりに辛かったが、それでも活気があって楽しか

ったんだ、あの頃は……」

どこか懐かしむ様子で、男は飲み屋の店主に語りかける。強面の店主は黙ってそれを聞いていた。

それが今はどうだ。どうしてもいつも会社を守ることしか考えちゃあいねえ、自分を守ることしか考えちゃあいねえ……！ おかしいとは思わないか？ 挙句の果てには俺みてえな古い人間はいらないんだとき」

男の語気が少し荒くなる。だが幸い店の客は普段より少なく、この中年の男の他にはカウンターの端でぼそぼそと枝豆を食べながら静かに酒を飲んでいる細身の男性と、その男性の二つほど離れた席でつまみも頼まず日本酒だけをぐいぐい飲む厚化粧の若い女だけだ。

誰が会社を大きくしたと思ってるんだ……！ 誰のおかげで今の会社に勤められてると思ってるんだ……！」

男が座っているカウンターの周りには、中の空になった徳利が数本と小さなお猪口が転がっている。男の顔もかなり赤い。どうやらすでにかなり呑んでいるようだ。

そのあと中年の男はぐちぐち文句を言っていたが、酒がまわってきたのか、だんだんと言葉数が少なくなってい

った。ついに男はカウンターで突っ伏してしまっていたが、それでもなお寢言のように、もそもそ口を動かして何かしゃべっている。

ああ……昔に戻れたらなあ……」

混濁していく意識の中、男は無意識のうちにそんなことを言っていた。

月明かりの静かな夜、少年は叢を走っていた。無造作に生えた雑草を踏みしめ少年が向かったのは、いつかの日に約束した場所だった。

はっ……、はっ……！」

湿気を纏っているからなのであろうか。肺を出入りする夏の空気が、何か重いものを身体に取り込んでいるように少年は感じた。

どこで鳴いているのかわからないが、暗闇からは虫や蛙などの声が無造作に少年の耳へと入ってくる。無論こんな時間帯に外へ出歩くことなどは禁止されているから、親に

黙って少年は家から出てきたのだ。

夕闇に少しだけ似ていて、明け方からは程遠い。陽にあたることのない夜の世界で少年と少女は出会った。

はあー、はあー……ごめん、遅くなっちゃった」

膝に手をつき息を整えながら少年は謝る。

「いいの、わたしもちょうど今来たところだから」

それが嘘であることに、少年はすぐに気が付いた。大抵こういう場合、少女は待ち合わせよりも早く来ていることを少年は知っているからだ。少女の優しい気遣いに、少しだけ少年の心が痛んだ。

「じゃあいこうか」

その気遣いを無駄にしないうちに、少年は少女の手をとって歩き出す。彼らが行こうとしている場所は、道なき道を通った先にある小さな湖畔だ。昔は夜になるとその湖畔に多くの蛍が飛んでいて、それをよく見に行ったものだという話を近所の年寄りに聞いたからである。

道中はもちろん話に聞いた通りの獣道で、月明かりの下、容赦なく虫が少年たちを襲ってくる。気づけば身体のあちこちがむず痒い。そんな状態で暗い叢を歩いているうちに

不安になってきたのか、少女はついに立ち止まってしまった。

ねえ。こんなところまで来て、わたしたち大丈夫かな……？今は蛍がいるかわからないって、あのおばあちゃん言ってたよ？」

だからそれを確かめにくんだろ？大丈夫だって、何かあっても僕が守るからさ」

その力強い言葉に安心した少女はゆっくりと少年の手に引っ張られて、再び足を踏み出した。

だが少年たちが歩いて歩いても、目に映るのは草ばかりで一向に湖畔へたどり着く気配もない。しまいには延々と同じ場所を彷徨っているような気さえしてくる。それでも少年と少女は見えない先の湖畔を目指して、懸命に歩を進めた。

いったっただろうか。ふとできた雲の隙間から月の光がさすように、それは不意に姿を現した。それと同時に張りつめた緊張が途切れて、二人の手はいつの間にか緩んで離れていた。

わあ、きれい……！

少女が思わず感嘆の声を上げたのも無理はない。

夏夜の風に水草はゆらゆらと揺らめき、水面に浮かぶは今宵の月。少女たちの追い求めていた景色が今まさに目の前へと広がっていたのだから。

すごい……！

少年の目を奪っていたのは水辺に漂う光の粒子。少し青みがかかったような美しい光が、まるで月を祝福しているかのように舞っていた。数は少ないものの、蛍に間違いないだろう。

ね、近くまでいってみようよ！」

さっきまで弱気だった少女が、そう言って少年の手をとる。少女に手をひかれながら、少年はゆっくりと水辺まで近づいた。湖畔の水は、丸みを帯びた水底の小石が月明かりで透けて見えるほど澄んでいる。

その時偶然、一匹の蛍が少女のそばを通り過ぎ、ふいと湖畔の方へ飛んでいった。それがきっかけとなったのか、少女はこんなことを言い出す。

ねえ、少しだけ水の中に入ってみない？」

うーん……僕はここでいいかな」

えー、なんでよー。冷たくて気持ちいいよ？」

少女はしゃがんで、瘦せた手で湖畔の水をすくった。湖畔の水位は浅く、おそらく少女の膝の高さよりも低いだろう。

「……やっぱりいい」

少年は拒む。現実のものとは思えないほど幻想的な湖畔が、底なしの深い沼のようにも見えたからだ。

「じゃあ仕方ないね。私はいくよ」

「……やめといた方が、いいよ」

少年は怖くなった。少女がその美しい世界に取り込まれて帰ってこれなくなるような気がしたからだ。

「どうして？」

「……………」

少年は答えられない。なぜそんな気がするのか、自分でもわからなかったからだ。

戸惑っている間に、少女はすでに片足を湖畔へとつけていた。静かな湖畔に波紋が広がり月は揺れる。その光景を前に、少年は動くことができない。

「ほら、全然大丈夫だよ。……えい！」

「わっ……………！なにするんだよ！」

「ばしやりと少年の顔へ水がかかる。だるい夏の暑さを癒すような、そんな冷たさだった。」

「あはは……………ふふふ……………」

少年の声は、もう少女には届かない。周りの蛍と同じように、少女も夜の湖畔で舞いはじめる。いつしか少年の目に映る湖畔の少女は、さっきまで隣にいた少女とは違うように見えていた。

少女は笑いながら、水をすくっては空に向かって振りあげる。跳ねた水しぶきが、より強く月を揺らした。

夕闇からは遠くなり、明け方にはやや近い。陽にあたることのない夜の世界で少年と少女は出会った。

月と蛍と少女の夜だった。

「十一さん、お客さん！起きてください、もう店閉めま

すよ！」

ゆらゆらと揺れる感覚と耳元の低い声とで、中年の男は目を覚ました。酒のせいか、ずきずきと頭が痛む。ぼんやりとした視界であたりを見回すと、すでに他の客は一人もいなかった。

お客さん、勘定願います」

中年の男が立ち上がると、それを見計らったように強面の店主がそう言った。それに対して男は何も言わずにさっさと勘定をすませると、ふらふらとした足取りで店を出ていった。

店を出ると多くの人間が歩いていた。こんな真夜中でも都会の人影は絶えないらしい。夏の湿った風に吹かれて、男は酒と頭痛で茹った頭が、一気に冷めていくのを感じた。雑踏の中で、男は先ほどまで見ていた夢を思い出そうとしていた。人は時として夢を見るが、その内容を憶えていることはほとんどない。この男も例外ではなかったようで、頭の中に霧でもかかっているかのように何も思い出せなかった。

ただ、昔に戻ったような胸の高鳴りだけが男の中で反響し

ていた。

常に周りは変わり続けている。あれほど田舎だったこの街も、いつしかビル群の林立する都会へと変わってしまった。その中で独り、自分だけが取り残されたような気がしてきて、男は思い出すことをやめた。

ネオンライトに飾られた夜の街はまだ明るい。きっとこの街が眠ることはもうないのだろう。道行く人々とすれ違ひながら男が歩いていると、ふと誰かに名前を呼ばれたような気がして後ろを振り向いた。その時、この男が見た月は――。